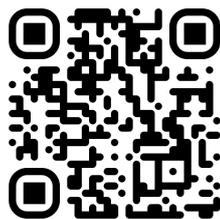


こどもの居場所と発達障害（特性）

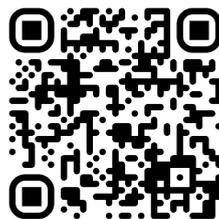
指導教員	金沢学院大学	教授	広根礼子			
参加学生	4年	栗野園菓	熊谷日菜子	清水仁美	高橋萌絵	
		藤井文音	本田鈴音	山下祥希		
	3年	糸野美桜	大塚夢来	加治明莉	観田丈晴	倉本遥加
		小梁美海	崎田せな	寺越遥人	林優真	土田佑芽

本活動で協働させていただきました、かなざわっ子 nikoniko 倶楽部 喜成様、
NPO 法人ぽっかぽか 瀧様、親子ふれあいランド 宮崎様、
そのほか、活動に参加してくださいました皆様に感謝申し上げます。

活動動画 2025 年度



広根ゼミ Instagram



4年 栗野園葉 熊谷日菜子 清水仁美 高橋萌絵 藤井文音 本田鈴音 山下祥希
 3年 糸野美桜 大塚夢来 加治明莉 観田文晴 倉本遥加 小梁美海 崎田せな
 寺越遥人 林 優 真 土田佑芽

活動の目的

こども食堂は様々な悩みに寄り添う場として役割を担える可能性がある。こども食堂が、不登校や発達障害を抱える当事者や保護者の居場所として機能していることを検証し、学生がアドボカシー役を担う。「特性を認め合うこと」「地域につながること」を通じて、関係人口の拡大に貢献したい。

こどもの居場所と発達障害（特性）

活動の内容

(1) バンダナおよびのぼり旗の企画・デザイン

6月 つながる多様性バンダナのデザイン決定

7月 のぼり旗のデザイン決定

7月 シルクスクリーン印刷でバンダナの制作



バンダナが人と人をつなぐコミュニケーションツールとなる、何枚でもつなぐことができるデザインを考案。ゼミ生の投票によって線の太さや色を選び、ページュ、茶、橙の3色に決まった。



こども食堂のぼり旗をリニューアル。両面印刷するため表と裏の2案を作成した。多様性をパッチワークで表現。手描きでぬくもりのある雰囲気に仕上げた。



(湯涌創作の森シルクスクリーン工房)

(2) イベントの運営サポートとワークショップの開催

8月 ワークショップ in 七尾

宿題おたすけデー

夏休みの絵画課題サポートとバンダナワークショップ
 (七尾市矢田郷地区コミュニティセンター)

参加者：小学生・中学生、学生、食事のボランティア、スタッフ、総勢50名



9月 ワークショップ in 金沢

講演会「こども食堂と発達障害」

講師：大高一則氏 児童精神科医

講演会サポーターとバンダナワークショップ
 (金沢市地場産業振興センター)

参加者：3歳～高校生、学生、関係者、総勢46名



(3) 展示による活動報告と周知

10月

つながるつたわるにこにこバンダナ展

(共栄火災海上保険株式会社・南町)

オレンジ色の布を背景に、バンダナ作品とパネル、見た人にも自身でイメージしてもらえよう彩色前のバンダナを展示。人通りが多い立地であり、通行人や観光客が笑顔になる空間を演出した。



11月

石川県デザイン展

(しいのき迎賓館)

11月11日から16日まで、活動記録や子どもたちの感想、ワークショップ映像を展示した。同展示では、近隣で開催中のバンダナ展も紹介し、活動の全体像を視覚的に伝わるよう工夫した。



活動の成果

午前も午後もアドバイスを受けながら、真剣に制作ができた充実感が伝わってきた。

発達障害との関わり方やその特性をどのように伸ばしていくかを学んだ。ワークショップでは子どもたちと自然に向き合い、全員が活動に臨機応変に対応していた。

宿題おたすけデー
 参加した子どもたちからの感想

じぶんだけのバンダナをつくれてよかった

お姉さんたちがいっぱい教えてくれて、もっと上手になりました

色付けや混ぜ方、グラデーション、他にもあまり出来なかったことが少しレベルアップした気持ちになりました

発達障害講演会
 学生の感想

大高先生の「自立とは人にうまく甘えること」という言葉が印象に残りました。よく考えてみればひとりですべてができる人はいないので、上手に他者と頼り頼られ生きていけたらなと思いました。

できないことを怒るのではなく、できることを伸ばしたり、約束させるという対応の仕方が、発達障害の方だけではなく自分達にも当てはまるなと思いました。

Award News!!

NPO 法人日本中国朱鷺保護協会主催
 トキの絵コンクール 入賞

動物愛護絵画コンクール

石川県知事賞 優良 日本獣医師会長賞 入選

宿題おたすけデーに参加した子たちの絵がコンクールで賞を受賞しました!

今後の活動

来年度もこども食堂がこどもの居場所として、多世代・多様性の交流の場として機能するための支援を継続していく。今年度実現に至らなかった「リニューアルしたのぼり旗の全県配布(譲渡会)」についても、行政との連携を模索しつつ、実現のタイミングを検討していく。

1. 活動の要約

本事業では、こどもの居場所や地域の交流の場として、近年ますます重要性が高まっているこども食堂の普及活動を行ってきた。今年度は新たな視点から、こども食堂の増加に伴い利用が増えている、発達障害などの特性を持つこどもや保護者への理解を深める活動を展開した。

8月には小中学生を対象とした「宿題おたすけデー(絵画課題のサポートとワークショップ)」を七尾市で実施し、9月には金沢市で発達障害に関する講演会の運営補助とワークショップを行った。これらの準備として、ワークショップ用のバンダナと、こども食堂の開催時に掲げるのぼり旗を制作した。活動成果は、保険会社のショーウインドウ展示や石川県デザイン展への出展を通じて周知したほか、ゼミやこども食堂のSNS(Facebook・Instagram等)とホームページを利用して、随時情報発信を行った。

2. 活動の目的

全国のこども食堂は、2024年に1万867箇所へ達し、公立中学校の数を上回った。同年、石川県内は98箇所となり、2025年4月の珠洲市でのこども食堂開設をもって、県内全19市町でこども食堂が誕生したことになる。石川県内の中学校87校3分校よりは多いが、県内小学校198校3分校にはまだ遠く及ばないのが現状である。

近年、地域のこども食堂では、発達障害などの特性を持つこどもや保護者の利用が増えている。自閉スペクトラム症・学習障害・注意欠如多動症などを抱える家庭にとって、こども食堂が重要な居場所となっているという。単なる食事提供の場を超え、地域での生きづらさを「生きやすさ」へと変える、多世代・多様性の交流拠点としての役割が期待されている。本活動では、学生がアドボカシー(代弁・権利擁護)の役割を担い、「特性を認め合うこと」や「地域とのつながり」を検証することで、関係人口の拡大に貢献することを目指した。

3. 活動の内容

今年度は、発達障害から発想した「多様性」と「つながり」をキーワードに、以下の3点に取り組んだ。

- (1)バンダナおよびのぼり旗の企画・デザイン
- (2)イベントの運営サポートとワークショップの開催
- (3)展示による活動報告と周知

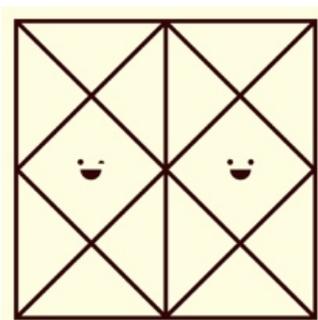
主な活動を表1に示す。なお、表1からは除外したが、大学の定例ゼミにて、ディスカッション・視察・試作・進捗確認・活動の振り返りを実施した。

日時	実施内容	学生参加人数
5月30日	キックオフミーティング	16名
6月	ワークショップの企画とバンダナデザイン	14名
7月	のぼり旗のデザイン	15名
7月27-28日	バンダナのシルクスクリーン印刷	17名
8月9日	宿題おたすけデー:夏休みの絵画課題指導とワークショップ	11名
9月14日	講演会「こども食堂と発達障害」:運営サポートとワークショップ	17名
9月29日	県庁訪問(健康福祉部少子化対策監室)	-
10月10日-2月	つながるつたわるにこここバンダナ展	4名
11月11-16日	第52回 石川県デザイン展	16名
12月-1月	検討会と報告準備	17名

表1 活動内容

(1)-1 バンダナのデザインとシルクスクリーン印刷

6月、「多様性」と「つながり」というキーワードから、人と人をつなぐコミュニケーションツールとしてバンダナの使用を決定した。ゼミ内コンペを経て、笑顔が配置された格子状のデザインを選出した。このバンダナは縦横に連結可能で、関係性の広がり表現している。ワークショップでは、参加者が染色ペンで自由に彩色する事により、様々な仕上がりが楽しめる。バンダナの地色は、ベージュ、オレンジ、茶の3色に決まった。7月末、1泊2日の日程で、金沢湯涌創作の森シルクスクリーン工房にて、100枚を刷り上げた。



バンダナのデザイン



のぼり旗のデザイン

(1)-2 のぼり旗のデザイン

7月、県内子ども食堂をつなぐツールとして、のぼり旗をリニューアルした。ゼミ内コンペにて、パッチワークをモチーフにしたぬくもり感のあるデザインが選出された。屋外掲出時の視認性を考慮し、片面は黄色、もう片面はピンクの地色の両面仕様ののぼり旗が完成した。完成後、活動を共にした地域団体に順次配布した。



バンダナの色を検討



バンダナのシルクスクリーン印刷

(2)-1 宿題おたすけデー(七尾市矢田郷地区コミュニティセンター)

矢田郷地区コミュニティセンター内にある親子ふれあいランドから依頼を受け、8月9日、午前に夏休みの絵画課題サポート、午後にバンダナワークショップを開催した。参加者は、近隣の5つの小中学校から集まった子どもたち20名。親子ふれあいランドは、児童の健全育成と子育て支援を目的とした施設で、今回の参加者は、普段から施設を利用している子どもが多いが初めての子どももいるという。また、意思疎通の難しい子どもが含まれるという情報があった。

これまでは、絵手紙教室の先生が1人で行っていたことを、今回初の試みで、学生がマンツーマンに近い形で寄り添う体制を整えた。高・低学年、2つの部屋に分かれて制作が始まると、色の相談をしたり、学校の話をしたり、別の部屋に見学に行ったりしながら、打ち解けていった。下書きを準備してきた子どもが多く、ほとんどの子どもが午前中の2時間で作品を完成させた。昼食ではボランティアによるカレーライスを囲み、交流を深めた。午後はバンダナワークショップを開催した。「夏休みにしたいこと」というテーマで、アイデアを下書きした後、笑顔が描かれた格子状のデザインのバンダナに、染色ペンで自由に描いてもらった。学生にお手本やサインをねだる子どももあり、和気あいあいとバンダナ制作を楽しんだ。



午前の絵画指導



午後のバンダナワークショップを終えて

(2)-2 講演会「こども食堂と発達障害」（金沢市地場産業振興センター）

9月14日、児童精神科医の大高一則氏を招いた講演会が、かなざわっ子nikoniko倶楽部の主催で開催された。ゼミでは、ワークショップの準備の他に、大高氏の著書を回覧して臨んだ。講演会は3部構成となっており、大高氏の基調講演のあと、児童養護施設の職員、社会福祉士、発達障害就労支援者、こども食堂運営者の4名によるパネルディスカッションがあり、その後パネラーによるテーブルトークが行われた。ゼミ生の半数は、講演を聞いて発達障害への理解を深め、テーブルトークでは、板書を担当した。残り半数は、同じ会場の後方でバンダナワークショップを開催し、保護者が講演に集中できる環境を整えた。ワークショップに参加したのは、3歳から高校生まで幅広い年齢の6名。最初は場の雰囲気緊張気味だったが、次第に打ち解けて、手を動かしながらとても楽しそうに学校や好きなキャラクターの話などしてくれた。



パネルディスカッション



バンダナワークショップ

(3)-1 つながるつたわるにこにこバンダナ展 開催

10月10日、翌年2月までの会期で、金沢の中心街、南町に位置する共栄火災海上保険株式会社の正面ショーウィンドウに於いて、展示を開始した。目を惹くオレンジ色の布を背景に、多様性をテーマにゼミ生が描いたバンダナ作品とメッセージボード、展示を見た人にも自身でイメージしてもらえるように、彩色前のバンダナを展示した。人通りが多い立地であり、通行人や観光客が笑顔になる空間を演出した。

(3)-2 石川県デザイン展 出展

11月11日から16日まで、しいのき迎賓館で開催された石川県デザイン展では、活動記録や子どもたちの感想、ワークショップ映像を展示した。同展示では、近隣で開催中のバンダナ展も紹介し、活動の全体像が視覚的に伝わるよう工夫した。



バンダナ展とデザイン展

4. 活動の成果

宿題おたすけデーに参加した子どもたちからは、「楽しかった」「またやりたい」といった喜びの声が寄せられた。「お姉さんたちがいっぱい教えてくれて、もっと上手になりました」「色付けや混ぜ方、グラデーション、他にもあまり出来なかったことが少しレベルアップした気持ちになりました」「じぶんだけのバンダナをつくれてよかった」というコメントもあった。午前も午後もアドバイスを受けながら、真剣に制作ができた充実感が伝わってきた。保護者からも「宿題をここまで進めてくれて助かった」「子どもから楽しかった話をたくさん聞いた」との声が寄せられ、活動の意義を実感する事ができた。

施設の担当者からは、「大人に対してなかなか心を開けない中学生も、学生にはにこにこ笑顔で向きあっていた」という感想が届いた。親や教師ではない「大学生」という存在が介在する意義が高く評価され、世代を超えて共に活動することの重要性を再確認する機会となった。

秋口には、指導した子どもたちが出品した「動物愛護絵画コンクール」で4名が受賞・入選を果たし、「トキの絵コンクール」でも1名が入賞するなど、具体的な成果につながった。

発達障害講演会の運営サポートを通じて、ADHDなど発達障害との関わり方やその特性をどのように伸ばしていくかを学んだ。ワークショップでは、幅広い年齢の子どもたちと自然に向き合う姿が印象的で、全員が準備や片付けを含む活動全体において臨機応変に対応していた。

2025年12月時点で、全国の子ども食堂は過去最高となる1万2,601箇所となり、公立の小学校・義務教育学校を合わせた1万8,545校の7割に近づいた。石川の子ども食堂は、102箇所となった。

5. 今後の活動計画

来年度も、子ども食堂が子どもの居場所として、多世代・多様性の交流の場として機能するための支援を継続していく。今年度実現に至らなかった「リニューアルしたのぼり旗の全県配布(譲渡会)」についても、行政との連携を模索しつつ、実現のタイミングを検討していくことで、運営者へのエールや各子ども食堂間のつながりに寄与していきたい。

6. 活動に対する地域からの評価

本活動について、かなざわっ子nikoniko倶楽部、喜成様より下記の通り評価をいただいた。

今年は「発達障害(特性)」をキーワードに進めてきました。絵画教室での児童と学生さんとのコミュニケーションが素晴らしく、発達障害が障がいではなく「絵画が好きな児童」という特性でおさまっていたことに私は大きな驚きを覚えました。そしてまた、そこに可能性も見出すことが出来ました。我々子ども食堂も関わり方によって、発達の障害ではなく、良好な関係性を気づくことができるという可能性です。本当に貴重な体験をさせて頂きました。また、子ども達の思考・想像力をバンダナで表現するというアイデアにも感動しました。言葉には表現できなくても、好みや特性がバンダナを通して感じる事ができる事が発見できたことも私どもにとって大きな学びでした。最後に子ども食堂ののぼり旗は、今まで片面印刷しか考えたことがなかった私どもでしたが、両面印刷で、しかも両面のデザインをクリアに見せるという工夫がされている事などの見る方に向けての配慮に感動しました。今回の事業もとても多くの発見を頂ける機会となりました。ありがとうございます。

つながる多様性バンダナ



バンダナワークショップの作品例